文学館だより

令和元年11月1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982－68－9511
文責　日高

月いまだかがやかざれどわだつみにうつらふ見れば黄金（こがね）ながせり

大正６年11月千葉県大原海岸を訪れ、詠草。わずか２泊の旅であった。『渓谷集』収録。

『創　作』に幕　　令和元年9月終刊記念号　刊行

不死鳥の牧水と「創作」　　歌人　伊藤一彦

若山牧水の声が聞こえる。
我が孫たちよ。本当によくやってくれた。妻の喜志子のあとを、息子の旅人が受け継ぎ、そして孫の聚一と篁子が中心になって、「創作」を第百六巻まで刊行してくれたことに心から御礼を言いたい。ありがとう。　（以下、省略）

『創作 終刊記念号』の２ページ目に、この一節がある。
『創作』は明治43年３月、牧水の編集によって創刊された短歌同人誌である。（短歌結社「創作社」は大正３年に設立される。）牧水の亡き後、牧水の意を継ぎ、妻喜志子 ― 長谷川銀作（喜志子妹の夫）― 若山旅人（牧水の長男）― 若山富士人（牧水の次男）― 若山とみ子（富士人の妻）と『創作』発行は続いた。平成18年からは牧水の孫（旅人の長男）、若山聚一（しゅういち）氏が引き継いでこられた。
これまで幾度となく休刊を余儀なくされた時代もみごと復刊を遂げてきた若山家。100巻記念号発行まで何とか存続を、と引き継いでこられた聚一氏。109年106巻という歴史の重みを痛切に感じる。
これまで編集に携わってこられた若山家の皆さま、創作社友の皆さま、関係されたすべての方々に感謝の意を表します。

ご来館ありがとうございました

先月は個人のお客様に加え、県内外からの団体様、日向市内の小中学生、延岡市内の小学生と10団体を超えるお客様にご来館いただきました。延岡市立東海小学校４年生の皆さんからお便りが届きましたので、抜粋して紹介します。
牧水先生は、坪谷尋常小学校卒業後、延岡高等小学校、旧制延岡中学校と進みます。「繁が牧水になった町」延岡市内に通う子どもたちの目はみな輝き、真剣な表情がとても印象的でした。

（先生のお便り） 子供達が楽しく学ぶ姿を見て、私ども職員も貴施設の見学をさせていただき、本当に良かったと感じたところでした。「帰宅して、牧水のことをたくさん話してくれた」という保護者からのお礼の言葉が届くほど、皆、楽しく勉強できたと満足しておりました。貴施設がさらに多くの方に知られ、若山牧水を誇りに思う子供達が、増えることを願っております。

○私が一番楽しかった場所は、牧水が生まれ育った家の見学です。とくにおどろいたことは、ゆかが土でできていることと、牧水が生まれる時「ことん」という音が聞こえたということです。私はこの見学でもっと牧水のことがしりたいなーと思いました。

○ぼくは牧水のお酒にかんする詩を２つしっています。
①かんがえて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆうぐれ
②それほどにうまきかと人のとひたらばなんと答へむこの酒の味

○家がおいしゃさんだということをはじめてしりました。三人の姉から「しげる」と言われているのもはじめてしりました。牧水がいろんなたん歌をつくってるのがよくわかりました。

第24回 若山牧水賞受賞者 決定　　今年はおふたり

若山牧水賞は、歌人・若山牧水の業績を顕彰するため、短歌文学の分野で傑出した功績を挙げた者に贈られる賞。選考を決定する年の前年の10月1日から当年9月30日までに刊行された歌集及び若山牧水論の著者の中から選ばれる。（若山牧水賞運営委員会）

（写真 本人提供）

松村 由利子（まつむら ゆりこ）氏

【受賞歌集】
『光のアラベスク』
（砂子屋書房）

【プロフィール】
福岡県生まれ
短歌結社「かりん」同人
沖縄県石垣市在住

【『光のアラベスク』より】

十二桁の数字届きて
　焼印を捺されたように背中が痛む

オクターヴ届かぬ手ゆえ
トランペットに転向したと青年は笑む

ツナ缶の箱買いという
　沖縄の習慣もわが日常となる

ガリ切りがわたくしの字のルーツです
　升目の中にちんまりと坐し

【『みやざき百人一首』より】

恋に似る旅の心よ
葉を揺らす椰子の並木に迎えられれば
（「フェニックス」を詠む　松村由利子）

松村さんは昨年度、NHK短歌（日曜放映）第３週の選者でいらっしゃいました。

（写真 本人提供）

黒岩 剛仁（くろいわ たけよし）氏

【受賞歌集】
『野球小僧』
（ながらみ書房）

【プロフィール】
大阪府生まれ
短歌結社「心の花」会員
東京都大田区在住

【『野球小僧』より】

新局長赴任して来る前日は
　パソコン画面に顔を呼び出す

オジさんも行ってもいいか訊いてみる
　双子の甥との夏の旅行に

生まれて初めて観戦せしは
　甲子園一塁側に祖父、父とおり

道の駅南郷一帯可憐なる
　ジャカランダとう紫の花

【『みやざき百人一首』より】

日向（ひむか）なる太陽の下（もと）聞こえ来る
　シャンシャン馬は嫁乗せたるや
（「シャンシャン馬」を詠む　黒岩剛仁）

【 選考委員講評 】　宮崎日日新聞（10 月 26 日付）掲載

松村作品　高野公彦さん

プラスチックごみやマイナンバーなど、社会への関心が至る所にあり興味深い。経済中心でいる流れに疑問を持ち、社会や文化の歩む方向への危惧を持っている。一方で風土や自然への愛、人間味も感じる。人はどう生きるか、根本を考えさせてくれる一冊だ。

黒岩作品　栗木京子さん

人間への好奇心や懐かしさをふまえた喜怒哀楽の表現が魅力。日常の現場に基づいた歌には、ユーモアと具体が効果的に使われておりインパクトがあった。「私は人好きゆえか」とあるように、全体を通して人間への愛情とシンパシーが伝わってくる。

【 今後の日程 】

1	授賞式及び受賞祝賀会	令和2年2月12日（水）15:00～	宮崎観光ホテル
2	受賞者学校訪問	令和2年2月13日（木）午前	日向市内の高等学校
3	受賞記念講演会	令和2年2月13日（木）午後	カルチャープラザのべおか

受賞者発表当日（10 月 25 日）現在の予定です。詳細は改めてお知らせいたします。例年、授賞式翌日には、牧水生家と当文学館にもお越しいただいています。メディアでしかお目にかかることのない歌人の方々を間近で拝見し、お話を伺えるという幸運なひとときです。

9 年振りにお二人受賞となりました。松村さん黒岩さんお二人に喜んでいただけるよう、今回もあれこれ考えながらお迎えの準備をしたいと思います。